

書 評

『シュンペーター伝』

—イノベーションの予言者

小 見 志 郎

トーマス K. マクロウ 著
 八木紀一郎 監訳 田村勝省 訳
 『シュンペーター伝』
 一灯舎 2010年12月

1. 経営史的アプローチによる『シュンペーター伝』

本書の原題は、“PROPHET OF INNOVATION : Joseph Schumpeter and Creative Destruction” (2007)である。資本主義の原動力として「イノベーション」を位置づけ、資本主義のもとでの経済成長には企業家による「創造的破壊」を追求しつづけることがまさに根底にあることをメッセージとしている。本書を書評として取り上げる理由も、資本主義が揺らいでいる21世紀初頭の世界経済において「イノベーション」を掘り下げて考えてみたいからである。

本書の特徴は、著者のトーマス・マクロウがハーバード大学のビジネススクールで経営史を専攻していたこともあり、シュンペーターの誕生から青年期、ウィーンで経済学を学んでいった成人期、ハーバード大学での学究生活と死までの賢人期と3部建てで、それぞれの期での経済社会環境や企業家精神の移り変わりなどを経営史と織り交ぜて論考しているところにある。

本書は邦訳書でも600ページを超えることから、その要約は差し控えたい。また、邦訳で、『シュンペーター伝』としているのは、監訳者によれば、青年期、成人期を通じて、その生い立ちや母親の苦勞、また、3人の夫人との関係など、私的な手紙などの膨大な資料をもとに組み立てて、人物伝的色彩が強いためだということである。3人目の夫人のエリザベスがこれら私的な資料などをハーバード大学に寄贈し、シュンペーターの私生活が余すことなく明らかになったためである。

しかし、評者は、著者の経営史をバックにした評伝で、資本主義との関わりを論点としているところに注目したい。なぜなら、先の3部構成において、著者はそれぞれの部の最初に自らプロローグを書き、シュンペーターの研究業績をたどっているからである。すなわち、第1部の青年期(1883 - 1926)を「革新と経済学」としてシュンペーターの業績をまとめている。第2部成人期(1926 - 1939)「資本主義と社会」では「シュンペーターは何を学んだか?」、第3部賢人期(1939 - 1950)「革新、資本主義、歴史」では「どのように、なぜ歴史と取り組んだのか」を問いかけている。

本書評では通常の本評のようにこれらの構成をたどって考察するのではなく、次のような論点

整理を行ってみたい。その第一は、シュンペーターがどのように資本主義思想と向き合って経済思想を形成していったかである。第二は、ウィーン大学、ボン大学、ハーバード大学などどのようにして豊富なアカデミア社会に囲まれていったか、そして、国際的な人脈を培っていったかである。日本でもシュンペーターの評価は生前から高く、日本の近代経済学を形成していった先人たちは多かれ少なかれシュンペーターに影響を受けるところが多かったからである。第三は、イノベーション論を軸に、「いまなぜシュンペーターか」を論じてみたい。シュンペーターと比較されることの多いケインズが不況期になるともはやされる日本で、経済位相がより根本的に遷移するなかでイノベーションが改めて問い直される必要性が高いからである。

2. シュンペーターの経済思想の形成過程

(シュンペーターの研究素地の形成・・・マルクス、ウェーバー、そして、ワルサス)

シュンペーターは、若くして『経済発展の理論』を書き上げている。1911年で、28歳の時である。シュンペーターの代表作で、その後の基本的な思考の枠組みを形づくるものとなった。そのなかで「どんな国でも個人の企業家精神が経済成長の鍵を握っている」との基本認識を明らかにしている。早くから企業家および企業家精神という知見が生み出された。その企業家精神による経済成長が如実な経済体制が資本主義である。

このような知見が生み出された過程では、シュンペーターの生い立ちと母親の優れた教育へのフォローがあったればこそと理解できる。また当時のウィーンの世界経済とも深く関連してくるものである。

本書の第1部に詳述されている、シュンペーターが学んだウィーン大学は、「20世紀初頭に経済学を学ぶのに最良の世界で3つ4つある場所の一つ」だった。そこでの経済学へのアプローチの第1がアダム・スミスの「国富論」をもとにリカード、ジョン・スチュアート・ミル（『経済学原理』）の系譜であった。ここでのアプローチでは、「資本主義的な生産の原動力が何を達成するかについて何の考えももっていなかった」としている。第2は、ドイツ歴史学派からの影響である。とくに9歳年上のマックス・ウェーバーとは親しく、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』に大きな感銘を受けている。ウェーバーと直接仕事もしているが、経済学の方法論とは距離があった。第3のアプローチが最も影響を受けたもので、今日いうところの新古典学派である。なかでも、レオン・ワルサス、スタンリー・ジェボンズ、カール・メンガーの3人の経済学者、とりわけ、ワルサスの一般均衡理論から長期にわたって最も影響を受けている。

また、カール・マルクス（1818 - 1883）はシュンペーターの業績に大きな刺激を与え、長年にわたって資本主義と社会階級に関する思考と好対照をなした。

このような学問的素地の形成は、後にいつも比較されることの多いケインズよりも、経済学の正統的な教育を引き継いできているものであり、資本主義にこだわった世界観がこれらの理論的素地から培われたことが本書で詳述されている。

(ヴィジョン・・・経済思想)

シュンペーターの研究業績は、『景気循環論』（1939年）、『資本主義・社会主義・民主主義』（1942年）、『経済分析の歴史』（1952年）の一連の著作である。個々の著書には、統計的なデータの問題、社会主義への過大な期待、計量経済学的方法論など、今日的にはいろいろな問題

が残されているが、むしろ社会科学全般にわたって大きな橋頭堡を築いたところに大きな評価がある。

著者のマクロウは、次のように述べている。

「1930年代半ば以降、経済学に対する新しい研究、それは、社会学と経済学を融合するというものだった」

「資本主義の研究の基盤を歴史という肥沃な土壌に求めた」

このような研究の過程で、シュンペーターは「ヴィジョン」という言葉を好んで多用したという。そのヴィジョンとは、社会科学に立脚した研究テーマの枠組みを示すもので、特にマルクスの『資本論』と対照するとき、マルクスのヴィジョンと呼んでいた。

中山・東畑（1995）によると、彼らに対して「社会の経済状況に関する包括的な理論ならば、すべて補完的ではあるが本質的に峻別さるべき二つの要素から成っている。その一つは、社会状態の基本的特徴についての理論家の見方であって、一定の時代の社会生活を理解するために何が重要であり、何が重要でないかについての見方という要素である。これをその理論家のヴィジョンと呼ぼう。第二は、理論家の技術であり、そのヴィジョンを概念化しまたは具体的な命題や理論に作り上げる用具である」と説明したという。

シュンペーターのヴィジョンは、「革新、企業家精神、信用創造」を骨格として、資本主義の原動力を考察したところにある。資本主義を主要なテーマとし、経済成長を促進するのが創造的破壊の過程として把握したところを若くして直感的に捉えたのも、独特なヴィジョンからだった。「資本主義の原動力の基本的な構造とイノベーション」が一連の著書に貫かれている。

3. 豊かなアカデミア社会と国際的視座

（勃興期のハーバード大学と近代経済学の草創期）

本書を読了したとき感じたのは、シュンペーターは優れて研究環境に恵まれた立ち位置にいたということであった。

ウィーン大学からボン大学へ、そして、第1次世界大戦が終わって1933年にアドルフ・ヒトラーが政権を奪取してから、シュンペーターはハーバード大学に移る。この間、私生活のうえでは大きな精神的なダメージを蒙っている（二度目の結婚相手アニー、生後すぐの子供、そして、母親を相次いで失っている）。そのような状況のなかでも、ハーバード大学は新しい大学像が形成されようとしており、哲学者アルフレッド・N・ホワイトヘッド、歴史学者アーサー・シュレジンガー、社会学者タルコット・パーソンズらの錚々たる大学者がシュンペーターを迎え入れた。ウェーバーに次いで社会学の金字塔をつくったパーソンズとは親しくしたという。

一方、ハーバード大学は当時近隣の、ある程度の資産家の弟が集まる地方の大学の一つにすぎなかったが、化学者ジェームズ・ブライアント・コナントが1933年に学長になってから、地方の特権上層意識に満ちた文化を能力主義に近いものに置き換える運動を展開し、今日の世界有数の大学に成長する基盤が固まりつつあった。シュンペーターに続いて、ガルブレイスも経済学のファカルティの一員に加わるなど、経済学の学府がシュンペーターを中心に築かれていった。シュンペーターはその後計量経済学会、アメリカ経済学会、国際経済学会の会長を務めるなど、アメリカの近代経済学草創の中心人物となっていた。

シュンペーターの研究環境は豊かなアカデミア社会を自ら牽引していったことにある。たと

えば次のような研究活動である。非公式の勉強会で、後に「七賢人シュンペーター・グループ」という伸び盛りの若手経済学者を組織している。メイソン、ハリス、チェンバリン、ハーバラー、ブラウン、テラー、そして将来ノーベル賞を受賞するワシリー・レオンチェフである。錚々たる経済学者たちである。

このようなシュンペーターを中心に近代経済学が形成されていった。また、ハーバード周辺には、後述するように、ケインズもいた。この豊かなアカデミア社会が世界中の経済学の若き学徒を惹き入れることになった。日本からも、都留重人がシュンペーターの教え子として知られる。

(シュンペーターの教育活動)

シュンペーターは1932年に教授を指名され1950年に死ぬまで、ハーバード大学の教授としては最高限度の給与をもらっていた。シュンペーターのゼミの大学院生に後のノーベル賞を受賞するサミュエルソンとトービンがいる。また、シュンペーターの熱狂的な崇拜者の一人に若手マルクス主義者のポール・スウィージーもいた。またシュンペーターには子供がいなかったから、とりわけ教育には熱心であった。

サミュエルソンは後に「彼は決して冗談は言わないが、なぜだか授業はウィットであふれていた」と回想している。このような議論の中で立ち往生することなく、シュンペーターはよく何か新しい思い付きを紙切れにメモして、それをポケットに押し込んでいた。書いたものを何も持たずに教室に来て、上着やズボンにメモをしまいこんで教室を出ていく先生だった。

本書には、シュンペーターの教育活動が細やかに描かれており、大いに参考になる。経済学だけでなく、大学等教育機関に関連する方にもぜひお読みいただきたいところである。

(国際的視座と日本との関係)

本書でシュンペーターを語るとき、もう一つ触れておきたいところはシュンペーターの世界観である。シュンペーターは、ウィーンでオーストリアの大蔵大臣を短期だが勤め、オーストリア・ハンガリー帝国、ハプスブルグの凋落を目の前にしたばかりでなく、第1次世界大戦の混乱、その後のヒトラーの台頭、そして、第2次大戦という20世紀の大激動期をともにしてきた。この間、ヨーロッパ、アメリカ、アジアの経済を観察し、ギリシャ語、ドイツ語、フランス語、英語など語学に堪能な能力もあって、正確に世界経済を捉えられる国際的視座をもっていた。

とくに、第2次大戦におけるアメリカの対独、対日政策をめぐる批判的立場にたっていた。3番目の妻エリザベスが日本研究者でもあっただけでなく、戦争直前の日本訪問で日本の経済発展を評価していたからである。とくにエリザベスは日本の実力をかなり正確に捉えていたようで、戦争回避を主張していたほどである。

惜しくも1950年にシュンペーターは亡くなっているが、戦後の日本経済の回復期とその後の高度経済成長期に優れた企業家精神をもつ企業家が台頭した現実を目の前にしたら、『経済発展の理論』を日本経済の土俵にのせ、より自ら評価したに違いない。

4. いまなぜシュンペーターか

(創造的破壊の再考)

さて、『シュンペーター伝』を書評として取り上げる意義である。いま資本主義の先行きとそ

のエンジンとしての「イノベーション」を再考する機会にわれわれは立たせられているからである。とくに、日本の産業社会が閉塞状況にあって久しく、新たなビジネス・スコープを切り開く視座が求められている。

今日世界の資本主義は、市場資本主義ばかりでなく中国などの国家資本主義といわれる、さまざまな形態が生じている。本書の著者のマクロウは、「資本主義は多種多様な状況下で実に様々な形態をとるものである」としているが、「資本主義のエンジンは十分理解された場合にのみ、猛然と唸りをあげて人類に脅威をもたらすのである」と指摘している。その資本主義のエンジンについて再考することが求められているのではないだろうか。単に、従来からのベンチャービジネスあるいは起業の促進を声高く叫んでも、これだけ新規上場企業数が減速どころかごく少ない状況では、従来のような技術革新を中心とした資本主義のエンジンそのものをオーバーホール、それどころか創造的破壊をしなくてはならないところまできていると思うからである。

シュンペーターが創造的破壊という言葉初めて使ったのは1942年のことだという。そして、「創造的破壊は資本主義にとって本質的な事実である。安定した資本主義というのは言葉の矛盾」とまで厳格に規定している。その創造的破壊を改めて問い直すことも必要となってきた。

「彼は、ほぼ50年にわたって、資本主義のあらゆる側面を探求した。その長所と短所、その社会的・文化的・経済的・人格的な側面すべてについてであった。彼は人々に資本主義の「原動力」を順調に機能させる方法を確実に理解してほしいと願っていた。・・・創造的破壊という形の革新が、資本主義だけでなく一般的な物質的進歩の牽引力であるという彼の洞察である。」

その担い手は、企業家である。『資本主義・社会主義・民主主義』のなかで、シュンペーターは「企業家は日々たちまち変化してしまうことが確実な状況の中において、彼らは足元から崩れ落ちる地盤の上に立っている」と企業家の創造的破壊という革新に注目している。この企業家（*entrepreneur*）という用語の主要な提唱者で、『経済発展の理論』の英語版（1911年）で最初に用いられたという。

この企業家についても再考の余地がある。現在の日本ではとりわけ起業を志す人材が少なくなってきたように、モチベーションが働く機会が少なくなっている。シュンペーターが資本主義を社会的・文化的・経済的・人格的な側面で探求してきたように、起業のモチベーションを高める金銭的だけでなく、社会に有用な価値追求の機会を発掘する必要がある。なぜなら、新しい欲望が消費者から見出されるのではなく、生産者から提案されるものである。その提案の動機づけが社会に有用な価値追求となると考える。

シュンペーターは、「経済発展の根本現象」として次のように述べている。

「経済的観察は、欲求充足があらゆる生産活動の基準であり、その時々々に与えられる経済状態はこの側面から理解されなければならないという根本的事実から出発するものであるとしても経済における革新は、新しい欲望がまず消費者の間に自発的に現われ、その圧力によって生産機構の方向が変えられるというふうにおこなわれるのではなく、むしろ新しい欲望が生産の側から消費者に教え込まれ、したがってイニシアティブは生産の側にあるというふうにおこなわれるのがつねである。」（吉川2009, pp.50）

その核となるのが「新結合」ないし「イノベーション」にほかならない。新結合は次の5つである。

- ① 新しい商品の創出
- ② 新しい生産方法の開発

- ③ 新しい市場の開拓
- ④ 原材料の新しい供給源の獲得
- ⑤ 新しい組織の実現

消費者の嗜好（欲望）を「需要」として顕在化するのは企業家の行う「新結合」によってである。

（需要創出型イノベーションへの期待）

伊東・根井（1993）の書き出しが「1883年、カール・マルクスが亡命の地ロンドンで死んだ年、20世紀を代表する二人の経済学者が生まれた。一人はJ.M.ケインズ、そしてもう一人がヨゼフ・アロイス・シュンペーターであった」というほど、ケインズとシュンペーターは比較されることが多い。しかしながら、シュンペーターはもとよりケインズまで最近では論議されることが少なくなっている。そのなかにあつて、吉川（2009）はケインズとシュンペーターの統合を視野に経済政策を論議しているところが注目される。

不況期において、1936年に刊行されたケインズの『一般理論』をもとに、有効需要不足による不況・失業を解決するマクロ経済政策が採用されることが多い。しかし、有効需要を創出するためにも公共投資など限界もみえている。

吉川（2009）は、「ロバートソンとケインズが指摘したことは、既存のモノやサービスに対する需要の飽和、有効需要の不足こそがマクロ経済の成長を抑制する根本的な原因だということである。経済の停滞を生み出す主因は、正統派の経済学がリカード以来長く信じてきたようにサプライサイドにあるのではなく、需要サイドにある。だとすれば、シュンペーターがリストアップしたさまざまなイノベーションの中でも、新しいモノをつくり出すプロダクト・イノベーション、つまり「需要創出型のイノベーション」こそが資本主義経済を根底において支える最も重要な核だと言えるのではないか。そしてここにおいてケインズの経済学とシュンペーターの経済学は明確な接点を持つのではないか。」とし、ケインズとシュンペーターの統合を目指すとしている。

『シュンペーター伝』は、閉塞感のある日本の経済社会からの新たな光明を見出すための再考の機会を与えるものではないだろうか。吉川（2009）が論じたように、ケインズとシュンペーターの統合を目指した「需要創出型のイノベーション」を考察するところがわれわれの役割でもあると考える。

（参考文献）

- (1) 中山伊知郎・東畑精一訳（1995）『新装版シュンペーター 資本主義・社会主義・民主主義』東洋経済新報社
- (2) 伊東光春・根井雅弘（1993）『シュンペーター』岩波新書
- (3) 吉川洋（2009）『いまこそ、ケインズとシュンペーターに学ぶ』ダイヤモンド社